

## 兄として

高野たかの  
匠翔しやうと

パソコン。新聞紙を細長く巻いた棒で、弟達が、いきなり頭を殴ってきた。戦いごっこをしているらしい。僕は、いつのまにか怪獣にされていた。僕は、イライラをおさえ、噴火寸前だった。

僕には、弟が二人いる。一人は六才。六才の弟は、にくたらしいこともあるけど、とにかく可愛くて癒されている。問題は、もう一人の九才の弟だ。九才の弟は、ピアノでは連弾で全国大会に行くし、運動会では縦割りリレーの選手に選ばれる。勉強は真面目にするし、サッカーを僕はやめてしまったけれど、弟は続けている。そして、クールな性格で要領がいいので、母に怒られない。僕だって一生懸命やっているのに、なぜか、母に怒られるのは僕ばかり。そんな弟を、僕はずるいなと思うし、ねたましくも思う。どうして僕が兄で弟が弟なのだろう。兄と弟が逆でもよかったのにと何度も思った。

ある日、家で弟が泣いていた。サッカーで上級生に嫌なことを言われたらしい。弟は、嫌なことを言われても言い返せない。言い返せなかったのは辛かったらと思うと同時に、その相手に怒りも湧いてきた。弟にとっては上級生だけど、僕にとっては下級生。その子を見つけて、代わりに言い返してやるかと思うくらいだった。その時は、弟を守りたいという気持ちでいっぱいだった。やっぱり僕は、兄なのだ。

「えいちゃんのお兄ちゃん。」  
小学校の廊下を歩いていると、かわいい声が出た。振り返ってみると、それは弟の友達だった。その子の後ろにいるのは弟だ。ニヤリと笑っている弟の顔には、えくぼがはっきり見える。授業で疲れていた心がふわっと安らいだ。

僕は毎年、弟達の誕生日のために貯金をしている。数か月前から何がいいかを考え、内緒でプレゼントを用意する。プレゼントの額は、僕の小遣いの二ヶ月分だ。当日飾り付けをした部屋を見て、弟達がびっくりしたり、嬉しそうな顔をしたりした時、僕は天井まで飛び上がりたくらい嬉しい。人のために何かすることが楽しいと感じるようになったのは、弟達のおかげかもしれない。

弟が二人もいると、怒ったり、悔しかったり、笑ったりと忙しいけれど、毎日が楽しい。弟達が、僕の人生を豊かにしてくれている。僕は、九才の弟のように器用ではないし、六才の弟のように愛嬌があるわけでもないけれど、いろんなアイデアを出したり、人と話したりするのは得意だ。それに、兄弟を大切に思う気持ちは、兄弟三人の中では一番だ。兄として、これからも二人の弟達を守っていきたい。そして、三人で足りないところを補い合いながら、一緒に助け合って成長していきたい。弟達、僕の弟に生まれてくれて本当にありがとう。